麓小学校　第１学年２組　算数科学習指導案

日　時　令和７年11月14日（金）
場　所　１年２組教室
指導者　山下　裕士

１　単元名　大きさくらべ

２　単元について

⑴ 教材観

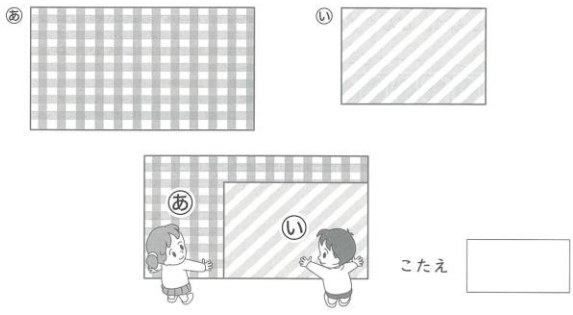
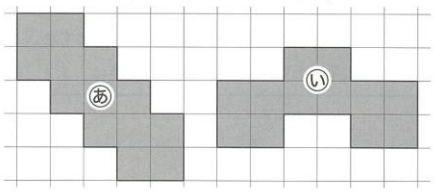
本単元は、学習指導要領第１学年の内容「C測定」（１）に示された指導事項のうち、長さ・かさ・広さ（面積）について、測定の基礎となる考え方とその概念の素地を養うことをねらいとして設定されたものである。

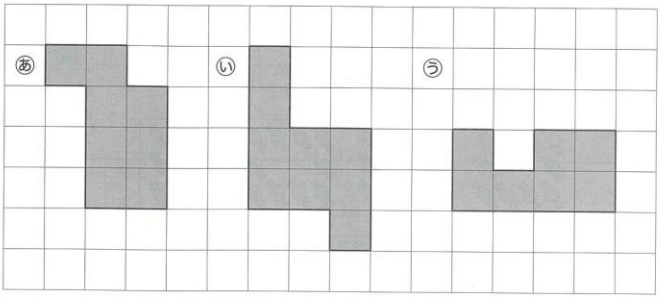
広さの学習においては、身のまわりにあるものの角をそろえて重ねて広さ（面積）を比べる直接比較、形を紙に写し取り、基になる大きさと比べる間接比較、具体物やマスの数を基準として、そのいくつ分あるかで広さを数値化して比べる任意単位による比較を学習する。長さ・かさ・広さをどれも「大きさ」ととらえがちであるが、同じ大きさ比べでも、比べる対象が違うこと、広さは面の大きさであることをおさえた上で、比較・測定の活動を長さやかさの学習と同じ流れ（直接比較→間接比較→任意単位による測定）で進めていく。広さを量としてとらえ、基準を定めることで数値化できるという経験は、第４学年以降の「B図形」の領域における面積の学習の理解の基礎となる。

⑵ 児童観

児童は、日常生活の中で「小学校の教室は、幼稚園のお部屋より広い。」「相手のドッジボールのコートは、自分たちのコートより狭い。」など、「広い」「狭い」という言葉を使っているが、平面ではなく立体的な空間として、広さを漠然とした大きさとしてとらえている。

事前テストの結果は、以下の通りである。（令和７年７月１５日実施　対象児童　１年２組　２４名）

問題	正答率	誤答例
1 どちらのシートがひろいですか。  2 どちらがひろいですか。りゆうもかきましょう。  	あ　９２％ あ　８３％ 理由２１％	 無答２８％

3 ひろいじゅんにかきましょう。  	い→あ→う ５６％	あ→い→う １４％ い→う→あ ８％ 無回答 ８％ う→あ→い ７％
4 ひろいほうにまるをつけましょう。 ① つくえ　（　　） おりがみ　（　　） ② こくばん　（　　） プール　（　　）	① つくえ ７２％ ② プール ４８％	無答　１８％ 無答　１９％
5 どちらがひろいですか。そのわけもかきましょう。   理由	６０％ ２２％	幅が広いから １４％ 無答　５％

1の２種類のシートの広さを比較する問題は、正答率が高かった。しかし、見た目だけで判断できるため、２枚のシートの角をそろえて比較している図に目を向けて考えているかどうかは分からない。

2のマスを使って広さを比較する問題は、正答率が８３％で高かった。しかし、マスを数えて答えを出すことができても、理由を書くときに、どのように表現してよいのか分からなかった児童が多かった。

3の３種類の図形の広さを比較する問題は、比べる対象が３つになることで、難易度が上がり、2の問題と比べて正答率が低くなっていた。マス目を数えずに答えを出したり、数え間違ったりしている児童がいた。

4の日常生活で目にするものの広さを比べる問題は、プールの学習を行う前に実施したこともあり、プールより黒板が広いと答えた児童が多かった。日常生活の中で、広さに目を向けた経験が少ないことが考えられる。

5の色板を使った広さ比べは、色板の枚数ではなく、作った形に目を向けてしまう児童が多かった。理由を書くところは、色板２枚で作った三角形の底辺の長さに注目して広いと答えている児童がいた。

(3) 指導観

長さやかさ、広さは、児童の日常生活の中で多く現れる量であり、重さや時間などと異なり、目で確かめることができ、手で触ることができるという点で測定が容易である。指導にあたっては、具体物を用いた活動や体験的な活動などの数学的活動を取り入れ、児童の生活経験と関連付けながら、比べ方を理解できるようにする。

広さの学習の指導にあたっては、長さやかさの学習での比較の仕方を想起させながら、広さを比べる場合でも似たような比べ方ができないか関連付けていく。広さの直接比較では、角をそろえて重ねるといった丁寧な操作活動を大切にしていきたい。任意単位を活用する比較場面では、数図ブロックやトランプなど身近にある

ものを比べられることに気付かせると共に、より分かりやすい同じ図形を使って考える学習を通して、「どちらが○○のいくつ分広い」という面積比較の表し方を活用していくようにしていきたい。

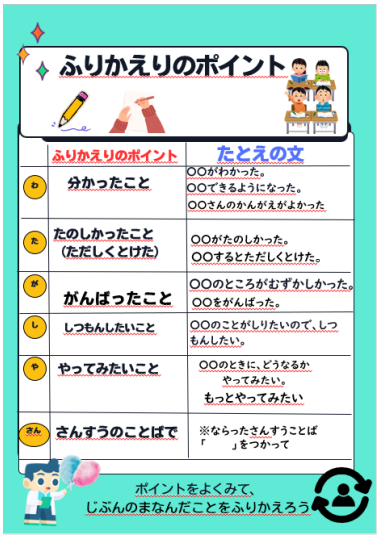
本時の学習では、「ふもとの学び　１０の視点」のうち、以下の３つを重点的に取り組んでいく。

【ふもとの学び①魅力的な教材と出会わせる】

「B図形」かたちづくりで学習した形を、「C測定」のひろさの学習に用いることで、形として見ていたものを広さとして捉えさせたい。その際、「三角（四角）の色板いくつ分」などの算数言葉を引き出すために、自分の色板を操作しながら考えさせる。

【ふもとの学び⑤説明・発表の機会の充実】

「なぜ？」「どうしてそう考えたの？」など教師が問い返し、分かったことをペアで伝え合って確認し理解を深めさせる。実際にペアで色板を操作させたり（行動）、前で色板を操作させてみんなに考えを見せたり（映像）、児童の言葉をつないで理解を深めさせたり（言語）することで説明・発表の機会を充実させる。



【ふもとの学び⑧学習を振り返る活動の設定】

導入に前時の振り返りを紹介することで、前時とのつながりや違いに気付かせたり、本時への興味・関心を高めたりしていきたい。学習の最後に、視点の中の「わかったこと・やってみたいこと」をポイントとして示して振り返りを書く時間を設定し、分かったという達成感や学習したことを生活場面に生かすことができるようにしたい。

３　単元の目標

量の理解の基礎となる経験を重ねて感覚を豊かにするとともに、長さ、かさ、広さなどの量の大きさの比べ方を考える力を身につける。また、身のまわりにあるものの大きさに親しみ、算数で学んだことのよさや楽しさを感じながら学ぶ態度を養う。

４　単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
長さ、かさ、広さなどの量を、具体的な操作によって直接比べたり、他のものを用いて比べたりすることができる。また、身のまわりにあるものの大きさを単位として、そのいくつ分かで大きさを比べることができる。	身のまわりのものの特徴に着目し、量の大きさの比べ方を見いだしている。	身のまわりにあるものの量に親しみ、算数で学んだことのよさや楽しさを生かし、楽しみながら量の大きさを比べる活動をしている。

5　指導計画と評価の計画（全９時間）

時	学習活動		評価規準（評価方法）〇記録に残す評価　・指導に生かす評価		
			知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
１	長さ	長さの直接比較をする。 ・鉛筆 ・ひも ・ノートの縦と横	・直接比較の方法を理解し、長さを比べることができる。（ノート）		・長さの比べ方に興味･関心をもち、工夫して長さを比べようとしている。（観察）
２		長さの間接比較をする。 ・紙テープを使った測定	・身近なものの長さや高さをテープに写し取って、比べることができる。（観察）		
３		長さの任意単位による測定をする。 ・指を使った測定 ・マス目を使った測定		・基準とする長さのいくつ分かで長さを表したり、比べたりしている。（ノート）	〇単位となるものを使うことで、長さを数で表せるよさに気づいている。（ノート）
４	かさ	かさの直接比較と間接比較をする。 ・形が異なる容器	・容器に入る水のかさを比べることができる。（観察）		・かさの比べ方に興味･関心をもち、進んで活動しようとしている。（観察）
５		かさの任意単位による測定をする。 ・コップを使った測定 ・ペットボトルとビン		・コップの何杯分かでかさを表したり比べたりしている。（観察）	〇単位となるものを使うことで、かさを数で表せるよさに気づいている。（ノート）
６	広さ	広さの直接比較と間接比較をする。 ・バンダナとハンカチ ・額縁と机	・直接比較の方法を理解し、広さを比べることができる。（観察）		・広さの比べ方に興味･関心をもち、進んで活動しようとしている。（観察）
７本時		色板で作った形の広さを比較する。 ・かざぐるまとさかな		・基準とする広さのいくつ分かで広さを表したり、比べたりしている。（ワークシート）	
８		広さの任意単位による測定をする。 ・机とバンダナ		・身の回りの物で重ねただけでは比べられないものの広さに着目し、広さの比べ方を考えている。（観察・ノート）	〇身の回りにある広さに関心をもち、その大きさを比べたり、分かりやすい方法で表そうとしたりしている。（観察・ノート）
９		評価テストをする。	〇学習内容が定着している。 （ペーパーテスト）	〇学習内容が定着している。 （ペーパーテスト）	

6　本時の学習（７／９）

⑴ 目標

同じ形の数を単位として、そのいくつ分かで広さを表したり比べたりすることができる。

⑵ 展開

過程	学習活動	（○）教師の指導・支援　（◆）評価
つかむ	1　前時を振り返る。	○「重ねると広さを比べることができる」や「もっと広さを比べてみたい」などの振り返りを取り上げることで、前時の学習のまとめを想起させたり、本時への興味・関心を高めたりする。
	2　本時の課題をつかむ。 【もんだい１】　どちらがひろいですか？ 	○既習の【かたちづくり】で使った色板（直角三角形）を並べて作った形を取り入れ、形として見ていたものを広さという視点で考えさせる。 ○同じ大きさの色板４枚を重ねて見せ、２枚ずつで作った形の広さを比べさせる。 ○色板を重ねて、同じ枚数であれば同じ広さになることを直接比較して確かめる。
	【もんだい２】かざぐるまときりんはどちらがひろいですか？ 	○形は異なっていても、同じ色板を８枚使っているので、直接比較しなくても広さが同じであることを確認する。 「まいすうがおなじときはひろさはおなじ」
	【もんだい３】かざぐるまとさかなはどちらがひろいですか？ 	○色板８枚でできている風車（直角三角形のみ）、魚（直角三角形と正方形）を提示し、この２つの広さを比べることを伝える。 **【ふもとの学び①魅力的な教材と出会わせる】**
	【めあて】　ひろさのくらべかたをかんがえよう。	
見通す	3　解決の見通しをもつ。 ・同じ形で比べる。 →三角形・四角形	○問題２は同じ形（直角三角形）を使ったが、問題３では四角が入っていることに気付かせる。 ○どのようにして比べるかをペアで話し合わせ、同じ形を使って比べるとよいことを確かめる。
考える	4　自力解決をする。 ①　ペアで一緒に調べる。 ②　色板を使ってもよい。 ③　どちらが広いか、わけも書く。 ④　他のやり方もないか、考える。	○見通しをもって学習できるように学習の流れを示す。 ○形ではなく広さに意識をもたせることができるように、色板を使って考えるように声を掛ける。 ○ペアで風車と魚の形を作らせ、同じ形がいくつ分で広さを比べるように声を掛ける。

		◆ 同じ形の数を単位として、そのいくつ分かで広さを表したり比べたりしている。　【思考・判断・表現】 B：基準とする広さのいくつ分かで広さを表したり、比べたりしている。 C：ワークシートの図の上に色板を置き、数を数えて広さを比べるように助言する。
まとめる	5　考えを共有し、検討する。 『考え』 ① 正方形を直角三角形になおす。 →直角三角形がいくつ分 ② 直角三角形を正方形に動かす。 →正方形がいくつ分	○発表の中で、説明が足りない部分を付け加えさせたり、大切な言葉（広さ）を取り上げたりすることで、思考の整理ができるようにする。 ○「なぜその形に合わせて数えたのか」を問い返したり、色板を操作させたりして「同じもので」や「いくつ分」という言葉を引き出させる。 ○「同じ形にするために四角形をどうするのか」を色板で操作させて「分ける」や「合わせる」という言葉を引き出させる。 ○四角形の考えが出ないときには、問題１の三角形２枚で四角形ができたことを想起させ、四角形でも広さを比べられることに気付かせる。 ○実際に色板を操作させ、四角形のいくつ分でも広さを比べられることを確認する。 ○まとめにつなげるために、「何がいくつ」を繰り返し問いかけ、分かったことをペアで伝え合って確認し理解を深める。 **【ふもとの学び⑤説明・発表の機会の充実】**
	【まとめ】ひろさは、おなじかたちのいくつぶんでくらべることができる。	
深める	6　陣取りゲームをする。 『ルール』 ① 最初に１枚置く。 ② じゃんけんで勝ったら色カードを１枚置く。 ③ 色カードはつなげるように置く。	○陣取りゲームは、広さを比べるゲームであることを伝え、動画でルールを提示する。 ○児童が広さを体感できるように台紙を用意し、色カードを置いて比べさせる。 ○電子黒板に投影した結果を見て、「四角形が何枚だから、どちらが広い」かを全体で考えさせる。
ふりかえる	7　振り返りのポイントを確かめワークシートに振り返りを書く。	○振り返りを書かせることで、本時の理解度を確認する。 ○「同じ形のいくつ分で比べられることが分かった。」という達成感や「他のものの広さも比べたい」など意欲が高まった振り返りを紹介し、生活場面に生かすようにする。 **【ふもとの学び⑧学習を振り返る活動の設定】**

麓小学校　第３学年３組　理科学習指導案

日時　令和７年 11 月 14 日(金) ５校時
場所　３年３組教室
児童数　２９人
指導者　教諭　片渕　光輝
　　教諭　南　みき

１　単元名　電気の通り道

２　単元について

（１）教材観

本単元は、「エネルギー」についての基本的な概念等を柱とした内容のうちの「エネルギーの変換と保存」に関わるものである。ここでは、電気の回路について、１個の乾電池と１個の豆電球を導線でつないだときのつなぎ方と豆電球の様子に着目して、豆電球が点灯するつなぎ方と点灯しないつなぎ方を調べ、電気の回路について問題を見いだし、回路ができると電気が通り、豆電球が作動することも捉えるようにする。また、導線を乾電池の二つの極以外につないだり、導線と乾電池がつながっていなかったり、回路の一部が切れていたりすると豆電球は点灯しないことも捉えるようにする。さらに、回路の一部に身の回りにあるいろいろな物をはさんだときの豆電球の様子に着目して、電気を通す物や通さない物を調べ、電気の回路についての問題を見いだし、物には電気を通す物と通さない物があることを捉えるようにすることをねらっている。これらの活動を差異点や共通点という視点をもって行うことで、理科の考え方を働かせながら、理科における資質・能力を育成していく価値ある教材である。

（２）児童観

本学級の児童は、実験や観察などの活動を伴う学習に意欲的に取り組むことができている。また、学習中に挙手をして、自らの気付きや疑問を発表する児童も多い。１学期の「こん虫の体のつくり」や「風とゴムの力のはたらき」の単元では、教師側が「チョウの体のつくりと比べて、トンボの体のつくりはどうなっているか」「風が弱い時と比べて、強い時はどんなふうに進んだか」と児童に比較させて考えさせる発問をする場面が多くあり、児童自ら比較しながら考えるには至っていない。そこで、２学期に「音のふしぎ」「地面のようすと太陽」「太陽の光」の単元では、児童が比較して考えることができるような事象提示を行ってきた。本単元では、比較しながら電気の回路について考えるような実験場面を仕組み、児童が主体的に問題を見いだし、実験を行い、問題解決をしていくような授業を行う。

また、実験や観察などの活動をするにあたって、意欲的に取り組もうとするあまり、自分の思いを友達に強い口調で伝えたり、思い通りにならなかった場合に参加を拒んだりする児童もいる。役割分担を伴うグループ学習を取り入れ、友達と協力したり、困っている友達に教えたりして、学び合うことでよりよい人間関係を築くこともねらいとしている。

【特別支援学級在籍児童】

	児童の実態	自立活動の目標
Ａ児	・分からないことや困っていることを周りに伝えることが難しい。 ・指示が複数あるときは覚えておくことが難しい。不安があるときは落ち着かず、その場に関係ないことを言ったり友達の言動に強い口調で注意をしたりすることがある。 ・交流学級では不適切な言動を自制することができるが、まわりと主体的に関わることは難しい。板書の写字が苦手で書く量が多いときは学習意欲が低下する。	・気持ちを静める対処法や援助を依頼する力など状況に対応する力を習得する。 ・口答指示を視覚的に示してもらい、不安要素をできるだけ減らしつつ、対人コミュニケーションのやり方を練習する。 ・気持ちの不安定感の自己対応、ソーシャルスキルを習得することや、成功体験を積むことで自己肯定感を向上させる。 ・記憶の学習
Ｂ児	・不安があるときは衝動性を抑えることが難しい。自分の思い通りにならないと強い口調で自己中心的なことを言ったり、たたいたりすることがある。 ・苦手な活動では参加を拒んだり、固まることがある。また、抽象的な概念を捉えることが難しく、自分の考えを言葉でまとめて書くことを苦手とし自分ができることでも支援を求めることがある。	・感情の自己コントロール ・気持ちを静める対処法を習得する。 ・できることと依頼すべきことの区別をつけ、成功体験を積むことで自己肯定感、積極性を向上させる。 ・語彙を拡充させ、抽象的な概念の理解を助ける。

C児	・思い込みや、自分の興味関心のあることについての衝動的な言動を抑えることができない。 ・支援学級において、十分に自己発散することで交流学級では衝動的な行動が抑えられている。	・自分や周りの状況を正しく捉えられるよう、コミック会話などを用いて振り返りを行い、よりよい自分に近づけるよう前向きに取り組めるようにする。

【通常学級における配慮を要する児童】

	児童の実態	自立活動の目標
D児	・学習に対して意欲的ではあるが、どんな手順でしたらよいのか、分からないことがあると突発的に質問をしてしまうことがある。 ・友達に対して気になることがあると、しつこく注意をしたり強い口調で言ったりしてしまう。自分の思いや考えが伝わらないと、机や筆箱を叩くことがある。 ・自分が言いたいことや質問したいことがあると、友達や先生の話を遮って話し始めることが多い。	
E児	・体幹が弱く、姿勢が崩れやすい。動作が緩慢。書字が苦手である。 ・一斉指示を聞いて、学習活動に取り組むことができない時がある。 ・困っていても黙って人の助けや時間が終わるのを待っている。 ・グループ活動では、活動内容が分かると主体的に活動に参加することができる。	

（3）指導観

第３学年では、理科の考え方の「比較」を重点的に学習に取り入れる。問題を見いだす際に、自然の事物・現象を比較し、差異点や共通点を明らかにしながら、考えを深めさせたい。

本単元では、まず豆電球に明かりをつけるという共通の実験を行う。その際に豆電球に明かりがつくつなぎ方だけではなく、同じ極に導線をつないだり、極ではないところに導線をつないだりするような豆電球に明かりがつかないつなぎ方も取り上げ、２つの現象を比較しながら、差異点を見いだせるようにする。実験においては、１つのつなぎ方ではなく、複数のつなぎ方で試す時間を十分に確保し、電気の通り道への興味・関心を高め、第２次につなげていきたい。

本時の学習では、「ふもとの学び　１０の視点」のうち、以下の４つを重点的に取り組んでいく。

【ふもとの学び②考えることを楽しむ「問い」づくり】

導入では、明かりがつく懐中電灯、絶縁シートが挟まっているため、明かりがつかない懐中電灯、クリップが挟まっているが、明かりがつく懐中電灯の３つの事象を提示する。

【ふもとの学び⑥学び合う活動の充実】

「物によっては電気を通す物と通さない物があるのだろうか」という学習問題を見いださせいくための手だてとしてそれぞれの事象の差異点を比べ、友達と話し合わせることで、挟まっている物に焦点化させていく。

【ふもとの学び③具体物を扱う時間の設定、④考えの形成・思考の整理】

実験する場面では、用意した８種類の物を提示し、「豆電球がつくということは試した物は電気を通す」ということを確認する。用意した８種類の物が電気を通すかどうかについての結果を予想し、ワークシートに書かせる。その後グループごとに実験し、結果を記録する。

実験の結果を学級全体で共有し、表に整理する。表に整理することでどのグループも同じ結果になるという客観性を認識させる。

【ふもとの学び⑧学習を振り返る活動の設定】

今日の実験で分かったこと、疑問を解決したいことなどのふりかえりの視点を与えることで、次時への学習への意欲を高めていくようにする。

【特別支援学級在籍児童】

	本時学習での困り感	本時学習での学び
A児	・見通しが持てない活動では不安が大きくなり学習意欲が低下する。 ・目に見えない事象を概念として捉えることが難しい。 ・どこを見れば良いか分からない。 ・自分の言葉で考えをまとめて書くことが難しい。 ・やりたい気持ちがあっても口に出せず、活動に積極的に参加できない。	・「１時間のながれ」を提示する。 ・回路図に電流の流れをペンでなぞりながら視覚的に示す。 ・ヘルプカードを使い、支援要請ができるようにする。 ・見る、比べる視点を指し示す。 ・席が近くの友達の考えを聞いて、まとめるよう声をかける。 ・グループ活動での成功体験を想起させ、自信ややる気を持たせる。
B児	・見通しが持てない活動では不安が大きくなり学習意欲が低下する。 ・電流が「わ」になって流れると明かりが付くという目に見えない事象がつかみにくい。 ・板書や実験のどこを見れば良いかわからない。 ・机上を整頓できない。物に刺激を受けやすい。 ・経験や語彙の少なさから「物」の名前や素材になじみが薄い。 ・自分の言葉で考えをまとめて書くことが難しい。 ・グループ活動がうまくできない。	・「１時間のながれ」を提示する。 ・回路図に電流の流れをペンでなぞりながら視覚的に示す。 ・見る、比べる視点を指し示す。 ・実験道具は番号と素材名を明記し、１つのかごに収める。 ・事前に「物」と素材に出会わせ、ふれあわせておく。 ・席が近くの友達の考えを参考にしてまとめるように声をかける。 ・グループで協力することについて事前学習（学活・道徳・自立活動を関連付ける。）
C児	・人より前に行きたがる。先にやりたがる。 ・自分のやりたいことにとらわれて指示を聞き逃したり、自分の思ったやり方で実験したりして、進めてしまう。 ・数多く実験したい、自分が中心となってやりたいという思いにこだわる。	・移動の場所や順番を具体的に示す。 ・役割分担の方法について再確認して納得して行動できるよう促す。 ・グループで協力することについて事前学習しておく。（学活・道徳・自立活動）

【通常学級における配慮を要する児童】

	本時学習の困り感	本時の学び
D児	・事象を見て、自分が気付いたことに対して、教師の説明を遮り、挙手する場面が多くある。 ・友達の考えや予想に対して「違う」と言い切り、自分の主張を通そうとする場面がある。 ・学習内容のイメージが湧かない時に「先生次は何ですか。」と必要以上に大きな声で伝える。 ・班で役割分担する際に自分の思いが反映されないと、激しい口調で言うことがある。	・「発表する時は挙手すること」「教師や友達の説明を最後まで聞いてから挙手すること」「質問があるかどうかを教師が確認してから質問すること」などを「やくそく」として示す。 ・友達の考えに対して「他の考えがあります」といった話型のモデルを示す。 ・学習内容の見通しが持てるように、「学習の流れ」を黒板に示す。 ・活動の見通しが持てるように、実験の方法を模範で示したり、実験の時間を予め伝えたりする。
E児	・実験をする時間なのか、記録をとる時間なのかなど、何をすればいいのか、分からない時は立ちつくしたり、固まったりする。	・グループごとに分かれて行う実験において、自分の役割を一緒に確認する。 ・様子を見て、こまめに声をかけ、できた際は賞賛し、価値付ける。

３　単元の目標

乾電池と豆電球のつなぎ方と乾電池につないだ物の様子に着目して、電気を通すときと通さないときのつなぎ方を比較しながら、電気の回路について調べる活動を行う。この活動を通して理解を図り、観察、実験などに関する技能を身に付けるとともに、差異点や共通点を基に、問題を見いだす力や主体的に問題解決しようとする態度を養うことができるようにす

る。

4　単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
① 電気を通すつなぎ方と通さないつなぎ方があることを理解している。 ② 電気を通す物と通さない物があることを理解している。 ③ 電気の回路について、器具や機器などを正しく扱いながら調べ、それらの過程や得られた結果を分かりやすく記録している。	① 電気の回路について、差異点や共通点を基に、問題を見いだし、表現するなどして問題解決している。 ② 電気の回路について、観察、実験などを行い、得られた結果を基に考察し、表現するなどして問題解決している。	① 電気の回路についての事物・現象に進んで関わり、他者と関わりながら問題解決しようとしている。 ② 電気の回路について学んだことを学習や生活に生かそうとする。

5　指導計画と評価の計画（全７時間）

時	学習活動	評価規準（評価方法）○記録に残す評価　・指導に生かす評価		
		知識・理解	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
1	夜と昼のイルミネーションの様子を見て、気付いたことを話し合う。			・電気の回路についての事物・現象に進んで関わり、他者と関わりながら問題解決しようとしている。 (観察・発言)
2 3	豆電球に明かりをつける。	○電気を通すつなぎ方と通さないつなぎ方があることを理解している。 (ワークシート)	○電気の回路について、差異点や共通点を基に、問題を見出し、表現するなどして問題解決している。(ワークシート)	
4 本 時	電気を通す物と通さないものを比べ、学習問題を作り、実験を行う。	○電気の回路について、器具や機器などを正しく扱いながら調べ、それらの過程や得られた結果を分かりやすく記録している。(ワークシート) ○電気を通す物と通さない物があることを理解している。(ワークシート)	○電気の回路について、観察、実験などを行い、得られた結果を基に考察し、表現するなどして問題解決している。 (ワークシート)	・電気の回路についての事物・現象に進んで関わり、他者と関わりながら問題解決しようとしている。 (観察・発言)
5	遠くにある豆電球に明かりをつける。			・電気の回路について学んだことを学習や生活に生かそうとしている。(観察・発言)
6 7	豆電球を作ったかんたんなおもちゃを作る。			・電気の回路について学んだことを学習や生活に生かそうとしている。(観察・発言)

６　本時の学習（４／７）

明かりがつく懐中電灯と明かりがつかない懐中電灯を比較しながら問題を見いだし、実験の結果を基に共通点、差異点について考察し、表現することができる。【思考・判断・表現】

（１）展開

過程	学習活動	指導上の留意点と評価 （【】は、ふもとの学び10の視点） 配慮を要する児童を中心とした留意点｛◎｝	配慮を要する児童の考えられる困り感｛★｝	配慮を要する児童への個別指導・支援｛☆｝
見通す	０　本時の学習の流れを知る。	◎「１時間の流れ」を提示し、大まかに活動内容と流れを説明し、質問する時間を設ける。また、進行状況を矢印で示すことで見通しが持てるようにする。	★１　１時間の学習内容や活動時間が不確かで見通しが持てないと不安で学習への参加が消極的になる。（配慮児全員）	☆１　机上に「１時間の流れ」を示す。（C児） ☆１　疑問等があれば発言を促す。補説することで再確認できるようにする。（D児）
事象を読み取る	１　事象を読み取り、自分の考えを書く。 （事象ア：開封済みの電池が入った懐中電灯は明かりがついた。） （事象イ：電池が入った新品の懐中電灯には、絶縁シートが挟まっており、明かりがつかなかった。） （事象ウ：電池が入った新品の懐中電灯にクリップが挟まっているが、明かりがついた。） 【予想される児童の考え】 ・シートが邪魔をしているから、明かりがつかないのかな。 ・クリップが挟まっていても、明かりがついた。どうしてだろう。 ・物には、電気を通す物と通さない物がありそうだ。	◎実物を見せた後、書画カメラで拡大し、見る・比べる視点を指しながら提示することで、焦点化させたい。 ◎回路図に電流の流れを色付けして示すことで、分かりやすくする。 ◎回路図とキーワードを関連付け、「物」で回路の電流の流れがさえぎられること、電流が流れないと明かりがつかないことを補説する。 ○事象イ、ウを見せることで、物により電気を通す物と、通さない物がありそうであることに気付かせたい。 ○本時の学習内容への興味・関心を高めるために、児童にとって身近な物を事象提示に用いる。 **【①魅力的な教材と出会わせる・②考えることを楽しむ「問い」づくり】** **（日常生活から理科の「問い」探し）** ○事象提示後の話し合いを通して、学習問題へ繋げる。	★２　実物だと見えづらいため、見比べるところが焦点化できない。（A児・B児・E児） ★２　電流が「わ」になって流れると明かりがつくという目に見えない事象がつかみにくい。（配慮児全員） ★２　物が挟まれていても明かりがつくのは、挟まれている物が電気を通すからであると、とらえることが難しい。（配慮児全員） ★２　電球の点灯と電流の関係がとらえられない。｛A児・C児・E児｝ ★３　分からないと声高に発言し苛立つ。（D児） ★４　日常生活における経験や語彙の少なさから、物の名前や素材になじみが薄い。（A児・B児・E児）	☆２　事象イ、ウの回路図を縮小したものを渡し、注目すべきところ｛挟まれている「物」・電流の流れ・豆電球の点灯の有無､｝を示す。（A、B、E児） ☆２　既習事項と事象イ、ウの違いから挟まれている物と点灯の関係に気づくように導く。 ☆２　明かりが点灯するか否かは、挟まれている物が電気を通すか・通さないかに因ることを補説する。｛A児・C児・E児｝ ☆３　隣で児童の疑問や主張を傾聴し、視覚化したり補説したりする。（D児） ☆４　必要に応じて、理科の学習の前に、「物」と素材に出会わせ、言葉や理科的な用語に触れ合わせておく。（A児・B児・E児）
実験する	２　学習問題を立てる。 （１）個人 （２）３年３組の学級全体 学習問題　どのような物が電気を通すのだろう （シートのほかに、どんな物が電気を通さないのだろう）	**【⑥学び合う活動の充実】** **（共通点や相違点を確認しながら）** ○児童が学習問題を立てられない場合は、事象提示後の話し合いで出てくると予想される「物」「電気を通す」等のキーワードを確認しながら、学習問題へと導く。 ◎キーワードの提示。明かりがつく＝電気を通す ◎個人の課題が作れたら、カードで合図をし、近くの友達と紹介し合うことを知らせる。 ◎友達が作った学習課題を参考にして、自分の学習課題づくりをするように促す。 ○できるだけ児童から出てきた言葉を使ってまとめる。	☆５　分からなかったりできないことがあると、活動が滞ったり、時間が来るまで黙って待っていたりすることがある。（A児・B児・E児） ★５　自力で学習問題を言葉で表すことができない。（配慮児全員）	☆５　分からないことの意思表示や「ヘルプカード」により支援要請ができるように促す。（配慮児全員） ☆５　事象イと事象ウから電池に挟まれている物の違いと点灯の関係に気付かせ、学習問題へとつなぐ。（A児・B児・E児） ☆５　複数のヒントカードを用意し、活用を呼びかける。（A児・B児・C児・E児） ・自分の考えに近いものを選択して書く。 ・（　）抜きにしておき、（　）の中のみ記入。 ☆５　書くことが困難な場合は、代筆したり、あらかじめ記入したものを貼らせたりする。

過程	学習活動	指導上の留意点と評価 （【】は、ふもとの学び10の視点） 配慮を要する児童を中心とした留意点｛◎｝	配慮を要する児童の考えられる困り感｛★｝	配慮を要する児童への個別指導・支援｛☆｝
実験する	3　実験する。 （1）実験方法を知る。 【実験する物】 ①釘(銅) ②釘(鉄) ③アルミニウムはく(アルミニウム) ④ペットボトル(プラスチック) ⑤コップ(ガラス) ⑥わゴム(ゴム) ⑦わりばし(木) ⑧段ボール(紙) ＜実験の手順＞ ①「物」を１つとる ②実験する(３回ためそう) ③記録係が結果をワークシートに書く ④「物」をかごの中に返す ⑤黒板にグループの結果をシールではる ・黄色シール…開かりがついたもの ・青色シール…開かりがつかないもの ⑥かたづける	◎視覚支援として、特に次のことを行う。 ①実験装置…実物を提示 ②実験する物…番号・図・物の名前・素材名を提示 ③手順書…箇条書きにし、図・写真を添付 ④ワークシート…できるだけ板書と同様の形式にする ⑤ヒントカードの活用等、個別対応ができる様にする ◎前時の学習で用いた回路をテスターとして使い、回路の間に物を入れて、電気が通るかどうかを調べることを、実物の実験装置を用いて確認する。 ○豆電球の明かりがつく＝試した物は電気を通すことをキーワードで示し、再確認する。 ○試す物（電気を通す物、通さない物）として、児童の身近な物を８種類用意し、様々な素材を調べることへの意欲を高める。	★６　実験の方法や流れが分からないと、見通しがもてず落ち着いて活動に参加できない。｛A児｝ ★６　具体的にどうするのか分からない、不安があることによって、活動できなかったり自分の役割が果たせなかったりする。（B児・C児・E児） ★７　机上の物を整頓できなかったり、実験する物の多さに刺激を受けたりしやすい。（配慮児全員）	☆６　グループ活動がスムーズに行えるように実験の仕方や流れを手順書で示し、具体的な活動のイメージを持たせる。（A児） ☆６　視覚支援（実物や図、写真等）と共に言葉を補うことで、疑問や不安の軽減を図る。（B児・C児・E児） ☆７　◎「物」は、番号と素材名を明記し、実験する物は、名前、素材(材質)名をナンバリングし、図と共に提示することで、視覚的に分かりやすくする。また、実験道具はグループ毎に１つのかごに納めて渡すようにする。
	（2）結果を予想し、ワークシートに書く。 【予想される児童の考え】 ・輪ゴム(ゴム)は、電気を通さなそうだ。 ・コップ(ガラス)は、つるつるしていて、電気を通しそう。 ・釘(鉄)は、ピカピカしていて、電気を通しそう。	○結果の予想、実際の結果の記録の仕方についてワークシートを基に確認する。 ○実験への意欲を高めるために、問い返しをしながら、予想の根拠や理由を学級全体で共有する。 **【④考えの形成・思考の整理】** ○役割分担（導線を持つ役割・物を入れる役割・結果を記録する役割）を決め、グループで協力して実験することを伝える。 ○「約束」として、豆電球を使わず乾電池の二つの極を直接導線でつなぐことが無いように再確認し、安全確保をする。 ◎イラストを付けた手順書を示しながら、接触不良等で、実験結果が正確性を損なわないように、複数回行うよう促すなどの「実験の手順」を確認する。	★８　ワークシートのどこに書いたらよいか分からない(B児)	☆８　ワークシート中の「予想」と「実際の結果」を書く欄を色分けして、区別しやすいようにする。

過程	学習活動	指導上の留意点と評価 （【】は、ふもとの学び10の視点） 配慮を要する児童を中心とした留意点｛◎｝	配慮を要する児童の考えられる困り感｛★｝	配慮を要する児童への個別指導・支援｛☆｝
	（3）グループで役割分担をして、実験をする。		★9　グループ活動がうまくできない。（配慮児全員）。 ★9　自分がしたいことを主張し過ぎて、友達に譲ったり協力したりすることができない。（B児・C児・D児） ★9　やりたい気持ちはあっても口に出せない。自信がなく積極的に参加できない。（A児・E児）	☆9　グループに配布した実験の「役割分担」「手順」を書いたカードを再確認する。 ☆9　役割分担と自分の役割や活動について問い、納得して活動ができるようにする。（B児・C児・D児） ☆9　これまでのグループ活動での成功体験を想起させ、自信とやる気を高める。（A児・E児）
	（3）実験結果をワークシートに記録する。 （4）学級全体で共有し、一覧表に整理する。	○一覧表に記録された実験結果を見て、気付きや分かることを発言させる。グループ間により実験結果が異なった場合は、取り上げ、（班で）原因を考えさせたい。 ○結果に客観性を持たせるために、全てのグループの結果が同じであることを確認する。	★10　実験結果の違いに強くこだわり、感想を声高に話す。（D児）	☆10　発言内容が学習の目的や内容に即していれば、取り上げる。個人的な見解による発言であれば、隣で傾聴して対応する。
まとめる	4　実験結果から考える。 （1）個人でワークシートに書く。 ＜これができたら good＞ ◎:「（　　）を入れると、明かりが（　　）。なぜなら～。 ○:「（　　）は、電気を通す」	○素材名を使って書くように声掛けをする。 ○学習評価（これができたら good）を児童と共有し、モデル **【④考えの形成・思考の整理・⑦学習評価を示した授業づくり】** 鉄や銅、アルミニウムは電気を通す。 木やゴム、プラスチック、紙、ガラスなどは電気を通さない。	★11　実験結果は分かっているものの、まとめて書くことが難しい。（A児・B児・E児）	☆11　分からないことの意思表示や「ヘルプカード」により支援要請ができるように促す。（A児・B児・E児） ☆11　書く活動が滞っている場合には、「物」の絵と名前・素材名を書いたマグネット版を用意し、まとめる際に使用させる。（B児） ☆11　複数のヒントカードを用意し、活用を呼びかける。（A児・B児・C児・E児） ・自分の考えに近いものを選択して書く。 ・（　）抜きにしておき、（　）の中のみ記入。 ☆11　書くことが困難な場合は、代筆したり、あらかじめ記入したものを貼らせたりする。
	（2）学級全体で共有する。 まとめる。	◆事象の提示から問題を見いだし、実験を行い、結果を基に考察・表現している。 【思考・判断・表現】（ワークシート） B：8種類の物を、電気を通す物と通さない物に分けた実験結果から言えることを表現することができる。 C：実験結果が示されている板書を確認しながら、実験して分かったことを言葉にさせる。		
	（3）本時の学習をまとめる。	○本時の学習問題を再確認し、その学習課題を受けたものが学習のまとめであることを確認する。 ○電気を通す鉄や銅、アルミニウムは「金属」であるということを伝える。	★12 「金属」や素材（材質）を表す言葉や概念をとらえにくい。（A児・B児）	☆12　理科にかかわる用語や語彙については、事前に予習しておいたり今後、復習したりする。（A児・B児）

過程	学習活動	指導上の留意点と評価 （【】は、ふもとの学び10の視点） 配慮を要する児童を中心とした留意点｛◎｝	配慮を要する児童の考えられる困り感｛★｝	配慮を要する児童への個別指導・支援｛☆｝
		○各自の学習問題については、本時で実験できなかったことは追実験する時間を後日確保することを伝える。		
ふりかえる	5　学習をふりかえり、次時への見通しをもつ。	○「今日の実験で分かったこと、疑問を解決したいこと、」等、ふりかえりの視点を示すことで、次時の学習への意欲を高めたい。 **【⑧学習を振り返る活動の設定】** **（次の学習の課題やポイントにつながるように）**	★13　ふりかえりを文章化することが難しい。（A児・B児・E児）	☆13 板書やワークシートをもとに、学習活動を確かめるよう促す。 ☆13　振り返りの視点の中から比較的に書きやすいと思われる「実験したこと」を中心に書くとことや視点ではなく感想でもよいことを告げ、書ける幅を広げる。（A児・B児・E児）

☆グループで協力することについて、事前指導(学活・道徳・自立活動と関連付ける)しておき、日常化を図る。
☆グループの友達に協力できるようにお互いにサポートし合うよう促す。
☆板書の形式と同様のワークシートを準備する。記入するところを具体的に指し示す。
☆近くの席の友達に書いたものを見せてもらうように頼むことを促す。
☆友達が書いたものを参考にして書くように声をかける。

麓小学校　第５学年１組　算数科学習指導案

日　時　令和７年11月14日（金）
場　所　５年１組教室
指導者　篠原　綾菜

１　単元名　面積（B「図形」（３）C「変化と関係」（１））

２　単元について

⑴ 教材観

本単元は、学習指導要領の第５学年２内容B「図形」（３）、C「変化と関係」（１）に示された内容を取り扱い、三角形、平行四辺形、台形、ひし形の面積の求め方を考え、公式をつくる学習に取り組む。まずは第４学年で学習した長方形、正方形の面積公式を活用して直角三角形の面積の求め方や公式を考え、順次、その他の図形の面積公式をつくる学習を進めていく。その際に、既習の図形に分割したり、図形の一部を移動して既習の図形に等積変形したりする数学的活動を通して、豊かな図形感覚を養うと同時に、公式の導き方を筋道立てて説明することができる力を身に付けさせることをねらいとしている。

また、三角形や四角形の面積を求める過程では、多様な考えが出ることが予想される。面積をどのように求めたのかを図と式を使って説明したり、友達の考えを聞いて理解したりして、活発な学び合いが期待できる。

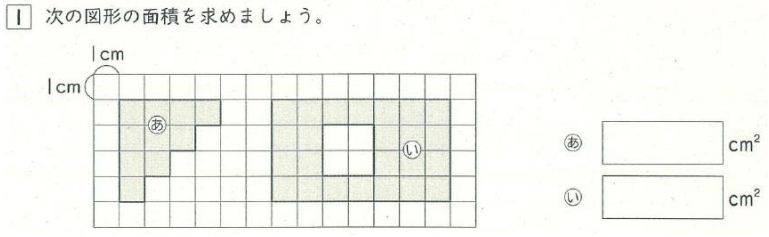
さらに、未習の図形の面積を求める学習を重ねる中で、既習の面積公式を活用して新しい課題を解決する経験を積むことで、自らの力で課題を解決しようとする態度を養うことが期待できる単元である。

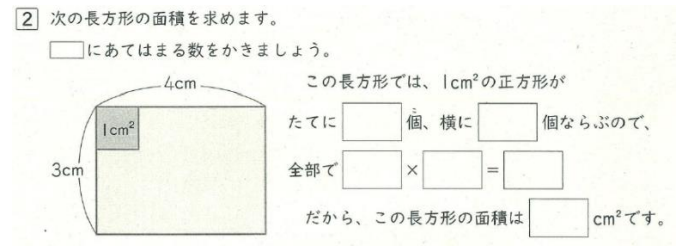
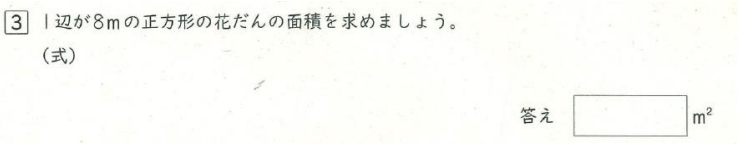
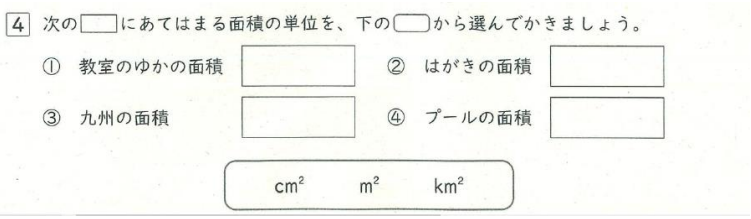
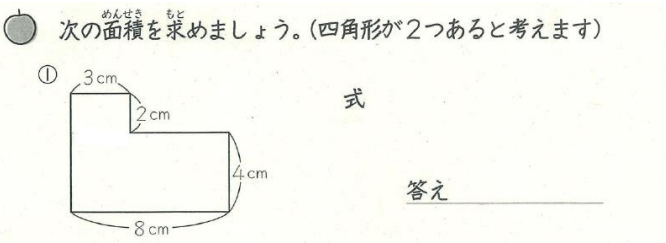
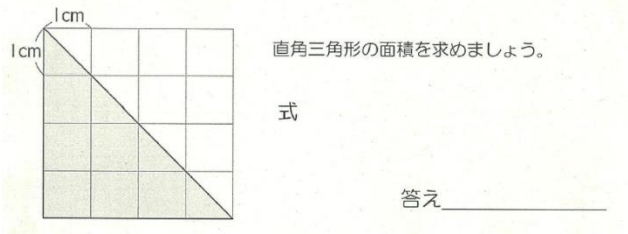
⑵ 児童観

本学級の児童は、学習課題に前向きに取り組み、自力でまたは友達と意見を出し合って解決しようとする姿が見られる。算数の学習についてのアンケートでは、「算数の学習が好きですか」という質問に対して、「はい」「どちらかといえばはい」と答えた児童が75%、「いいえ」「どちらかといえばいいえ」と答えた児童が25%だった。この結果から「はい」と答えた児童が多い一方で、算数の学習に苦手意識をもっている児童が一定数いることがうかがえる。

考えを伝える場面については、「自分の考えをもつことができるか」という質問に対して、「はい」「どちらかといえばはい」と答えた児童が82.1%、「いいえ」「どちらかといえばいいえ」と答えた児童が17.9%であった。考えをもつことに難しさを感じている児童も、友達との交流を通して、課題をなんとか解決しようという意欲は高まってきている。学級全体では、考えを友達と交流する機会を設けることで、友達に自分の考えを納得してもらおうと図に言葉で説明を付け加えたり、言葉での説明を図ではどう表すことができるのかを考えたりして、主体的に課題に取り組むことができるようになってきている。

前提条件テストの結果は、以下の通りである。（令和７年８月25日実施　対象児童　５年１組児童26名）

問題	正答率
	㋐　96%
	㋑　79%

	96%
	100%
	①100% ②100% ③100% ④100%
	式　88% 答え　88%
	式　6＋2＝8　25% 式　4×4÷2＝8　33% 答え　75%

長方形や正方形の面積を求める公式は95%以上の児童が習得できているが、それを活用してL字型の面積を求めることができる児童は88%と、やや低くなっている。直角三角形の面積（未習）を正方形の半分と捉えて求めることができる児童は33%と、図形を分割して考えることはあまりできていない。

(3) 指導観

指導にあたっては、単元の導入で近隣の学校の運動場を長方形や平行四辺形といった図形として捉えた写真を提示し、どの学校の運動場が広いかを予想する活動に取り組ませる。その中で、三角形や平行四辺形の面積を求めるにはどうしたら良いのだろう、という単元を貫く大きな問いをもたせ、意欲的に学習に向かわせたい。そして単元の最後には様々な形の運動場の面積を求め、どれが広かったかを確かめる活動を設定する。いろいろな形の運動場の面積を求める活動を通して公式の良さを味わわせ、生活や学習に活用しようとする態度を養いたい。

三角形や四角形の面積の求め方を考える学習では、紙やタブレット端末での操作活動に取り組ませたい。実際に図形を分割したり移動したりして既習の図形に変形させることで、三角形や平行四辺形などの面積も求め

ることができることに気付かせたい。いろいろな考えを出させるために、問題の図をたくさん準備し、書き込んだり切ったりして必要に応じて使えるようにしておく。さらに、図形の移動や変形のイメージがつかみやすいデジタル教材も準備しておく。また、学習の足跡を掲示物として残し、新しい図形の求積方法を考える手助けとなるようにしたい。

公式を導く学習では、面積を求める際に立てた式と図を結び付けて、もとの図形のどこの長さに着目して面積を求めているのかを考えさせたり、共通点に目を向けさせたりして、「できるだけ簡潔でいつでも面積を求められる」ことを意識させたい。

本時の学習では、「ふもとの学び　10 の視点」のうち、以下の３つを重点的に取り組む。

【ふもとの学び⑦学習基準を示した授業づくり】

児童が主体的な学び手となることを目指して、「これができたら GOOD！」という学習基準を児童と共有し、その達成度や学習の気付きを「振り返り」としてまとめる時間を設定する。学習基準は「友達に説明する」「〇つ以上考える」など具体的な言葉や数字で示し、児童に明確な目標を持たせて、粘り強く学習に取り組ませたい。

【ふもとの学び④考えの形成・思考の整理】

一人学びでは、台形の面積を求積できる図形に変えて考えるという見通しをもって、図を用いて考えさせる。図には、分割や移動を線や矢印で書き込ませ、考えが見えるようにすることを意識させる。その図と対応させて式や言葉で考えを説明するように促す。また、児童一人一人が学習問題に向き合うことを目指し、学習の方法を選ぶことができるようにする。具体的には、困り感のある児童には、ヒントカードを準備したり、自力解決にこだわらず早い段階から友達との交流を取り入れたりしていきたい。図にかき込んだり、実際に図を切ったりすることが苦手な児童には、図をコピーしたり切って移動させたりすることが容易にできるデジタル教材による操作活動を推奨して、自分なりの考えをもてるようにしたい。

【ふもとの学び⑤説明・発表の機会の充実】

多様な考えが出ると予想されるので、児童同士の学び合いを通して考えを広げたり整理したりさせたい。そのために、面積をどのように求めたのかを図と式を結び付けて指し示すなどしながら説明させるようにする。最初に 1 番多い考えを取り上げ、その後は次時の台形の面積の公式を導く学習につながる考えを中心に取り上げるようにする。自分の考えを説明させるだけでなく、図や式から友達の考えを予想して説明させたり、友達の説明を再現させたりと、様々な形での考えを交流させたい。また、それぞれの考え方を「三角形に分ける」や「平行四辺形に変形する」など児童にまとめさせ、キーワードとして板書に残して学習のまとめに生かしたい。

３　単元の目標

三角形や四角形の面積について、その求め方や公式を考えたり説明したりすることを通して、面積を求めたり平面図形の見方・考え方を深めたりするとともに、生活や学習に活用しようとする態度を養う。

４　単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
底辺と高さの意味や公式について理解し、三角形や四角形の面積を求めることができる。	既習の面積の求め方をもとに三角形や平行四辺形などの面積の求め方を考えたり、求積方法を振り返って公式を導いたりしている。	三角形や平行四辺形などの面積を求める活動に進んで取り組み、面積の求め方や公式のよさに気付き、生活や学習に生かそうとしている。

５　指導計画と評価の計画（全 14 時間）

時	学習活動	評価規準（評価方法）〇記録に残す評価　・指導に生かす評価		
		知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
1	・近隣の学校の運動場の面積を比較し、三角形や平行四辺形などの図形の面積について考えていくという単元の課題をつかむ。 ・直角三角形の面積の求め方を考える。	・長方形や正方形に帰着させて、直角三角形の面積を求めることができる。（ノート、発言）		・いろいろな四角形や三角形の面積を求めることに関心をもち、見通しを立てて取り組もうとしている。（観察・発言）
2	・三角形の面積の求め方を、既習内容をもとにさまざまに考える。		〇面積の求められる図形に帰着させて、三角形の面積の求め方を考えたり説明したりしている。（発言・ノート）	・三角形の面積を求めることに関心をもち、粘り強く取り組もうとしている。（観察・発言）
3	・三角形の求積方法を導く。	・公式を用いて、三角形の面積を求めることができる。（ノート）	・三角形の面積の求め方を振り返り、求積に必要な長さを見いだして公式を導いている。（発言・観察）	
4	・平行四辺形の面積の求め方を、既習内容をもとにさまざまに考える。		〇面積の求められる図形に帰着させて、平行四辺形の面積の求め方を考えたり説明したりしている。（発言・ノート）	・平行四辺形の面積を求めることに関心をもち、粘り強く取り組もうとしている。（観察・発言）
5	・平行四辺形の求積公式を導く。	・公式を使って、平行四辺形の面積を求めることができる。（ノート）	・平行四辺形の面積の求め方をふり返り、求積に必要な長さを見いだして公式を導いている。（発言・観察）	
6	・高さが図形の外にある場合の三角形や平行四辺形の面積の求め方を考え、求積公式が適用できることを理解する。		・求積可能な図形に帰着させ、高さが図形の外にある場合の面積の求め方を考えたり説明したりしている。（発言・ノート）	・高さが図形の外にある場合も求積公式が使えるよさに気付き、生活や学習に生かそうとしている。（観察・ノート）
7	・底辺の長さが等しく、高さも等しい三角形や平行四辺形は、面積も等しくなることを理解する。	・底辺の長さが等しく、高さも等しい平行四辺形は面積が等しくなることを理解している。（発言・観察）	・底辺に対して平行に頂点を動かしても、三角形の面積は変わらないことに気付いている（発言・ノート）	
8 **本時**	・台形の面積の求め方を、既習内容をもとにさまざまに考える。		〇求積可能な図形に帰着させ、台形の面積の求め方を考えたり説明したりしている。（発言・ノート）	・台形の面積を求めることに関心をもち、粘り強く取り組もうとしている。（観察・発言）
9	・台形の求積公式を導く。	・公式を使って、台形の面積を求めることができる。（ノート）		
10	・ひし形の面積の求め方を、既習内容をもとにさまざまに考える。 ・ひし形の求積公式を導く。	・公式を使って、ひし形の面積を求めることができる。（ノート）	・求積可能な図形に帰着させて、ひし形の面積の求め方を考えたり説明したりしている。（発言・ノート）	・ひし形の面積を求めることに関心をもち、粘り強く取り組もうとしている。（観察・発言）

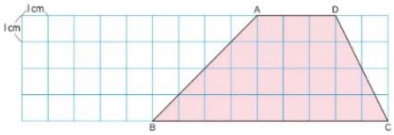
11	・学習内容を振り返る。			
12	・多角形の面積を三角形に分割して求める。		・多角形を三角形に分割すればその面積を求めることができることに気付いている。(発言・ノート)	・多角形の面積を求めることに関心をもち、粘り強く取り組もうとしている。(観察・発言)
13	・三角形の高さや底辺の長さを変えたときの面積の変わり方を調べる。	・三角形の面積は高さや底辺の長さに比例することを理解している(発言・ノート)		
14	・学習内容の理解を確認する。 ・近隣の学校の運動場の面積を求める。	・面積の公式の意味を理解し、三角形や四角形の面積を求めることができる。	・筋道立てて求積方法を考え、面積を求めることができる。	・面積の公式のよさに気付き、生活や学習に生かそうとしている。

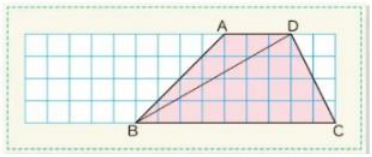
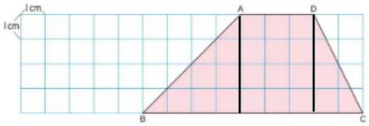
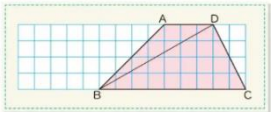
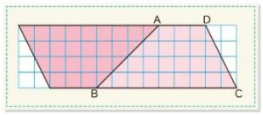
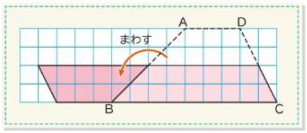
6　本時の学習（8／14）

(1) 目標

面積の求められる図形に帰着させて台形の求め方を考えたり、説明したりすることができる。

(2) 展開

過程	学習活動	(○) 教師の指導・支援　(◆) 評価
つかむ	1　本時の課題を確認する。  ㋮　台形の面積の求め方を考え、説明しよう。	○児童の振り返りを電子黒板に提示し、前時までに学習した図形の面積の求め方を振り返る。また、本時は台形の面積を求めることを確かめる。
見通す 考える	2　解決方法の見通しをもつ。 台形を知っている図形に変える →対角線をひく 移動させる	○前時までに学習した面積の求め方の中で台形でも使える方法がないか考え、解決の見通しをもたせる。 ○解決の見通しをもたせるために、対角線を引かせるなど具体的な方法をイメージさせる。
	3　自力解決を行う。 (一人でタイム・友達タイム) ・学習基準を知る。 これができたらGOOD! ○→台形の面積の求め方を考え、友達に説明することができる。 ◎→台形の面積の求め方を２つ以上考え、友達に説明することができる。	○粘り強く学習に取り組ませるために、児童に「これができたらGOOD！」として学習基準を示す。 **【ふもとの学び⑦学習基準を示した授業づくり】**
	・台形の面積を求め、図と式を関係付けて自分の考えを書く。 学び方を自分で決める ・プリント(紙)を切ったり、書きこんだりして考える。 ・タブレットのデジタル教材で考える。 ・一人で考える ・友達と一緒に考える　など	○既習内容を活用して追究できるようにするために、前時まで学習した内容を教室に掲示しておく。 ○いろいろな考え方を出させるために、台形の図はたくさん準備し、自由に使うことができるようにしておく。 ○図と式を関係付けて考えさせるために、どの図とどの式が対応するのか考えを書き込むように促す。 **【ふもとの学び④考えの形成・思考の整理】**

	〈ヒントカード〉   ・隣の友達に自分の考えを伝える。終わったら自由に考えを伝え合う。	◆ 面積の求められる図形に帰着させて台形の求め方を考えたり、説明したりしている。【思考・判断・表現】（ノート分析・行動観察） B：図と式を関係付けながら面積の求め方を考え、タブレットやノートに書いて友達に説明している。 C：面積を求めることが難しい児童には、友達の考えを聞いたり、ヒントカードを見たりして考えをもたせる。 ○考えを説明させることで、図と式を関係付けて説明する力を高める。また、考えを説明させることを通して、自分の考えを整理させたり、新しい考えに気付かせたりしてみんなでタイムの意欲につなげる。
深める	4　全体で話し合う。（みんなでタイム） 〈予想される児童の考え〉 ㋐対角線を引いて２つの三角形に分ける。  式３×４÷２＋９×４÷２＝24 ㋑2 倍にして平行四辺形にする。  式（３＋９）×４÷２＝24 ㋒上の部分を移動させ平行四辺形にする。  式（３＋９）×２＝24 ㋓三角形２つと長方形１つに分けて考える。 ㋔長方形に変形する。 ㋕付け足して長方形にして三角形２つ分をひく。　など	○児童のノートやタブレット端末を電子黒板に映し出す。図と式を関係付けて説明させる。必要に応じて理解したことを自分の言葉で説明させたり、友達の考えをもう一度説明させたりするなど様々な形で交流させ、児童が考えを広げたり整理したりすることができるようにする。 **【ふもとの学び⑤説明・発表の機会の充実】** ○学習のまとめにつなげるために、台形をどのような図形に変えたのかを問い返し、キーワードを板書に残すようにする。 ・対角線をひいて三角形に分けた。 ・２倍にして平行四辺形に変えた。 ・移動させて平行四辺形に変えた。など ○㋐㋑㋒以外にも、一部分を移動させて長方形に変形するなど、たくさんの考えがでることが予想される。どの考えも図や式と関係付けて説明することを意識させる。
	㋖　台形の面積は、三角形や平行四辺形、長方形などに変えると求めることができる。	
ふりかえる	5　本時の学習を振り返る。 ・振り返りのポイントを見ながら、本時の学習で分かったことやもっと知りたいこと、考えたことを自分の言葉でまとめる。	○本時の学習の達成度を◎○△で自己評価をする。また、次の学習でやりたいことや、本時の学習内容でこれから生かしたいことを問いかけ、次時へつながる振り返りを促す。

麓小学校　第６学年１組　教科「日本語」学習指導案

日　時　令和８年７月１日（水）５校時
場　所　６年１組教室
児童数　29 人
指導者　堤　大之介

１　単元名　敬語を上手に使おう

２　単元について

（１）教材観

「敬語」とは、話し手と聞き手の立場の違いや、その時の場の状況に応じて言葉を使い分けることである。敬語は日常生活において、相手への敬意や配慮を言葉で示すことで、人間関係を円滑にしたり、その場の雰囲気を形作ったりする役割を担っている。日本語において敬語は、「言う」という単語が、相手との関係や場の状況に応じて「言います」「おっしゃる」「申す」といった変化をする特徴をもつ。丁寧語・尊敬語・謙譲語という形で、語尾や単語が細かく変化し、それが文法として体系化されている言語は世界的に見ても珍しいものである。この敬語の複雑な変化を、日常生活において即座に、適切な形で使い分けることは非常に難しい。本単元では、生活の中の敬語を使うことが望ましい場面を取り上げ、どのような言葉を用いることが適切なのか児童に考えさせる。親や友達といった気安い相手との会話と、目上の相手と話す時や公共の場において発言する時といった場合の違いを意識させ、話し方を模索させたい。このことは、社会生活の中で公私混同することなく、どのような相手とも望ましい人間関係を築いていくためのコミュニケーション能力を育むことに繋がる学習である。

（２）児童観

本学級の児童は５年生までに、教科「日本語」で、敬語の使い方を知り、相手や場面に応じた話し方について考えるとともに、国語科で、丁寧語や尊敬語、謙譲語という敬語の種類について学習している。普段の生活からは、ほとんどの児童が、目上の相手との会話において語尾に「です」「ます」をつけ、丁寧な言葉遣いを心がけようとしている様子が見て取れる。しかし、「校長先生が大切なことをおっしゃった」といった尊敬語や、「そちらにうかがいます」といった謙譲語の表現まで意識して使っている児童はいない。また、友達の名前を呼び捨てにしたり、教師に対して馴れ馴れしい口調で話しかけたりするなど、敬語を使わないことが親しみの表現になると考えている姿も見られる。事前に国語科で学習した敬語の種類の使い分けについてのテストを行った結果、全て正解することができた児童は 35%であった。

（３）指導観

第６学年の教科「日本語」では、最上級生の心構えとして、学校生活全体の中で、日頃より敬語を積極的に使っていくことが大切であるということを実感させることを目標として、指導を行っていく。友達とカード遊びを楽しんだり、役割演技に取り組んだりする活動を通して、国語科で学習した敬語の種類について、実生活で使い分けようとすることの必要性を感じ取らせたい。本単元では、教科「日本語」授業づくりの 10 の視点」のうち、以下の２項目に重点的に取り組む。

【授業づくりの 10 の視点③具体物の扱い】

丁寧語・尊敬語・謙譲語という敬語の種類を振り返るため、動詞を指定された敬語の種類に言い換えたらどうなるかを考え、カードを取り合う遊びに取り組ませる。活動を通して、同じ言葉でも相手と自分の立場に応じて用いる敬語の種類が変わることを意識させる。

【授業づくりの 10 の視点⑤協働的な学び】

指定された場面でどのような敬語を使って話すことが望ましいのかを考える役割演技を行う。台本をどう書き直せば良いのかグループで意見を交流し、ペアを組んで実際に声に出してやりとりをする活動を通して、日常生活の中で敬語を適切に使い分ける感覚を養う。

学習の最後に全体で役割演技の様子を共有し、気付きや意見を伝え合いながら、日頃から立場の違いを考えて言葉を選ぶことの大切さを感じ取ることができるようにする。

3　単元の目標

丁寧語・尊敬語・謙譲語という敬語の種類と役割について知り、相手や場に応じた言葉の使い分け方について考え、実生活に取り入れようとする態度を養う。

4　単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
丁寧語・尊敬語・謙譲語という敬語の種類について知り、場面に合わせて使い分けることに気付いている。	様々な場面を想定し、その時に応じた敬語について考えて使っている。	学んだことを生かして、自分の生活の中でも、相手に応じた敬語を使う意識をもつことができる。

5　指導計画と評価の計画（全２時間）

時	学習活動	評価規準（評価方法）○記録に残す評価　・指導に生かす評価		
		知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
1 2 （本時）	丁寧語・尊敬語・謙譲語という敬語の種類について知り、相手や場面に応じて単語を使い分けるカード遊びを楽しみながら、理解を深める。 【③具体物の扱い】 相手に応じて丁寧語・尊敬語・謙譲語を使い分ける日常生活の場面を想定した役割演技に取り組む。 【⑤協働的な学び】	・敬語の種類について知り、場面に合わせて使い分けることに気付いている。 （観察・発言）	・設定された場面に応じた敬語の使い方について考え、カード遊びに取り組んでいる。 （観察・発言・ワークシート） ・場面に応じた適切な敬語の使い方について考え、役割演技に取り組んでいる。 （観察・発言・ワークシート）	○学んだことを生かし、相手に応じた敬語を使おうとしている。 （ワークシート） ○自分の日常生活において、敬語を適切に使い分けようという意欲をもっている。 （ワークシート）

6　本時の学習（２／２）

（１）目標

役割演技を通して、立場の違いによる適切な言葉選びについての理解を深め、日常生活において丁寧語・尊敬語・謙譲語を使い分けようという意欲をもつことができる。

（2）展開

展開	学習活動	（○）教師の指導・支援　（◆）評価
気付く	1　目上の相手と話す時の動画を見て、敬語の使い分けの大切さに気付く。 ・敬語を使わないと、失礼な感じがする。 ・丁寧過ぎても、変な感じだなあ。	○敬語を使わないことと同様に、過剰に用いることも相手に違和感を与えることがあるという問題意識をもたせるために、目上の相手に全く敬語を使わない会話と、敬語を過剰に使いすぎた会話の様子の動画を提示する。２つの動画を比較する。
	相手に応じて、言葉を上手に使い分けよう。	
知る	2　敬語の種類について振り返るクイズに取り組む。 クイズで取り上げる言葉 「行く」「食べる」「言う」	○特定の言葉を丁寧語・尊敬語・謙譲語に言い換えるクイズに取り組ませ、敬語の種類について復習させる。
考える	3　敬語を使うことが望ましい場面の役割演技の台詞を考える。 ・「食え」は、尊敬語にできそうだ。 ・「くれてやる」は、別の言い方にできないだろうか？	○黒板にそれぞれの敬語の役割をまとめ、適切な使い分け方を意識させる。 ○目上の相手と会話する時に敬語を全く使っていない場面の台本をもとに、どの言葉をどのように言い換えればよいか考えさせる。 ○どの言葉を言い換えれば良いと思うか、台本に印を付けさせ、考えを全体で共有する。
学び合う	4　グループで、敬語のよりよい使い方について話し合う。 ・「食べてください」は「召し上がってください」にしたらどうだろう。 ・「くれてやる」を謙譲語にすると、「差し上げる」になるね。	○グループで書き換えた台本を交互に読み合わせる。良い台詞を取り入れたり、改善点を指摘したりすることで、敬語の使い方について考えを深めさせる。 ○尊敬語や謙譲語を意識できていたかという視点を与えてから、工夫した点や、自信がない点などを話し合わせる。
	5　グループで役割演技を行い、互いに気付きや感想を伝える。 ・元の台本より、良くなった。 ・文章で書いた時は良かったけど、普段、こんな言い方してないね。	○グループの中でペアを作らせて、書き直した台本をもとに役割演技を行わせる。実際に口に出して話した時の気付きや、他のペアの様子を見て感じたことについての意見を交流させる。 **10の学びの視点　⑤協働的な学び**
まとめる	6　全体の場で役割演技を発表し、よりよい敬語の使い方についての考えをまとめる。	○発表された役割演技の言葉の使い方の良かった点を指摘し、敬語を適切に使うことは、会話をしている当人達だけではなく、周囲の人も快い気持ちにしてくれることを感じ取らせる。 ◆日常生活において、言葉を適切に使い分けようという意欲をもつことができる。　【主体的に学習に取り組む態度】（ワークシート） B：相手との立場の違いや、丁寧語・尊敬語・謙譲語の違いを意識して敬語を使おうという意欲をもつことができている。 C：何に気をつければいいのか書くことができない場合、全体の場で共有した考えをもとに、立場の違いと使う言葉の関係を振り返らせる。
振り返る	7　本時の学習を振り返る。	○本時の学習で意識したことを、日常生活のどのような場面に生かしていきたいかを考えさせる。

第２学年特別支援学級（情緒）算数科実践　　指導者　教諭　西原由美子

単元名　かさ

麓小　ふもとの学びをもとに実践をすすめて授業に取り組んだ。



（柱Ⅰ）日常生活や学習経験から
児童が興味や関心をもつような魅力的な教材と出会わせる工夫

・本単元の導入にあたっては、ふもとの学びをもとに魅力的な教材と出会わせるために、児童が調べてみたい、やってみたい、考えてみたいと興味関心が膨らむように自分が知りたいこと、やってみたいことを考えさせるようにさせたい。



児童が量りたいと思い準備したもの



（柱２）子どもの特性や能力に応じて提示した課題を解決するために具体物を扱う時間を設定する。

・児童にとって初めての「かさ」の学習であり、量の単位は初めて出会う。
・経験値のない単位、量なのでまずは自分が量ってみたい器を家から持ってくるようにしたり、学校で日頃使っている物の量を量るようにさせたりした。





・「秘伝書」

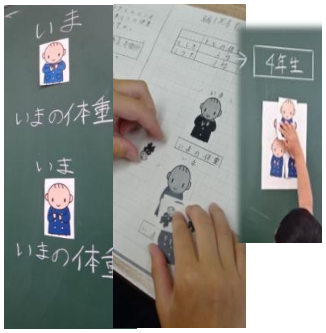
児童に見通しを持たせるためにかさの単元計画をもとに学習活動や、振り返りを書けるようにしたものを「秘伝書」としてひとり、ひとりに持たせるようにしたい。自分がすることや、してきたことが視覚的に見ることができるので次への意欲づけや、自分の学習の足跡となると考える。

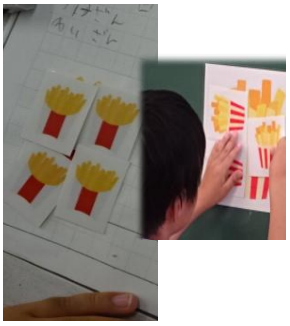


第４学年特別支援学級（知的）算数科実践　　指導者　教諭　友永健生

単元名　割合

柱Ⅰ：日常生活や学習経験から児童が興味や関心をもつような魅力のある題材に出会わせる工夫
ふもとの学び【知的好奇心の喚起】





【興味をもつ教材を使用ー絵カード】



クジラとイルカを実物と同じサイズに描き、児童には、魅力のある題材に出会わせることができた。児童がイメージしやすい具体物や半具体物、絵を使いながら視覚的に分かりやすい活動に取り組ませた。子どもたちはワクワクし、学習意欲が高まったと感じることができた。

柱2 ：課題を解決するため、子どもの特性や能力に応じた視覚的な提示方法、具体物を操作する時間を設定する
ふもとの学び【考えることを楽しむ探求の過程 】



【半具体物の操作ー実物大・体験的】

【具体物の操作】



自分のノートの上で操作
（５時目）＊繰り返しの工夫



黒板の上で操作　（発表）＊繰り返しの工夫

本単元では、すべての時間で半具体物の操作を行い、児童が常にイメージしやすく学習に取り組めることができた。また、自分のノート上で操作したことを、黒板上で操作を行うことで、自分の考え方を周りの児童に簡単に説明でき、視覚的支援にもなった。

第１学年１組　日本語学習指導案

日　時　令和８年９月３０日（水）５校時
場　所　１年１組教室
児童数　３３名
指導者　吉本　沙桜

１　単元名　昔話を読もう・楽しもう

２　単元について

（１）　題材観

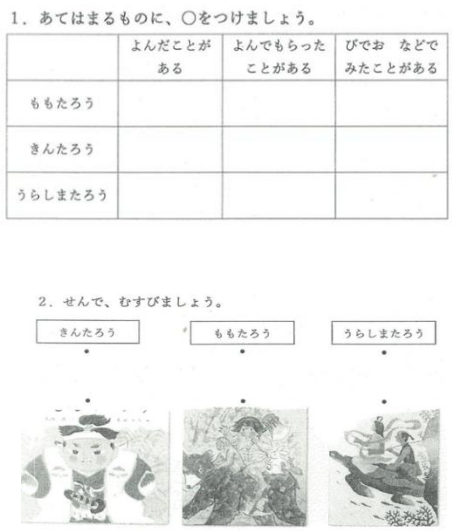
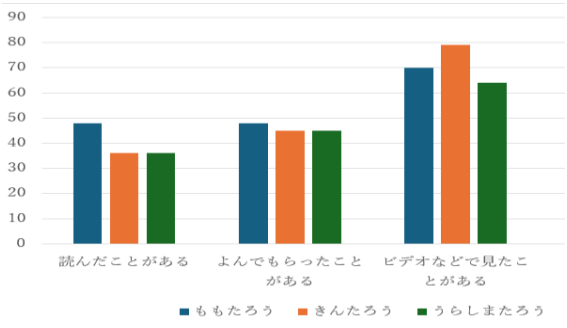
本題材、日本の伝統的な言語文化である昔話は、民衆の間で口承伝承されてきた物語である。特徴として「むかしむかし」などの決まり文句で始まるなど特定の形式をもち、言葉の言い回しがリズミカルで心地よい表現が多い。内容には、勧善懲悪、思いやり・助け合いなど道徳的な考えや生き方のヒントが込められている。

教科書には、「桃太郎」「金太郎」「浦島太郎」の三太郎の場面絵と童謡の歌詞が記載されている。これらを手掛かりに日本の昔話を見聞きし、読んだり歌ったりすることによって、昔話に親しみ、面白さや楽しさを味わうことができる。また、児童の想像力や多様な考え方を受け入れる力が育まれ、昔ならではの風習を知り、言語文化の繋がりを感じることのできる題材である。

（２）　児童観

本学級の児童はこれまでに、国語科の学習の中で「おむすびころりん」の単元で昔話を読んだり、読み聞かせボランティアの方に昔話を読んでもらったりして、日本の昔話に触れてきた。現段階での児童の昔話への興味・関心や、読書経験を把握するために事前アンケートを実施した。結果は以下の通りである。

（R8.7.14　１年１組　３２名に実施）

内容	主な回答
	 ２　正答率　９３% ２名の児童が、すべての昔話の題と絵を線で結ぶことができなかった。

3．しっているにほんのむかしばなしを、かきましょう。	3　国語科で学習した「おむすびころりん」を書いた児童は、５８％であった。 その他の回答は以下の通りである。 ・いっすんぼうし　・いっきゅうさん ・３まいのおふだ　・かぐやひめ ・ねずみのおきょう　・みみなしほういち

問１では、約半数の児童が、日本の代表的な昔話である３つの話を、何らかの方法で見聞きした経験があることが分かった。一方で、どのお話も知らないと回答した児童が１名いた。

問２では、ほとんどの児童が正しく昔話の題と主人公の絵を線で結ぶことができた。しかし、２名の児童が正しく結ぶことができなかった。２名の児童は、３つの話をのうち１つまたは２つの話を、見聞きした経験はないと回答している。

問３では、無回答の児童が１番多く、「おむすびころりん」以外の昔話を書くことができた児童は１１名であった。また、１１名の児童が書いた昔話はすべて合わせても６種類しかなかった。

以上のことから、昔話を読んだり見たりする経験が少なく、知っている昔話も限定されていることが読み取れる。

（３）　指導観

指導にあたっては、日本の昔話に親しみ、面白さや楽しさを味わうとともに、もっと読んでみたいという昔話への興味・関心を高めるために昔話クイズに取り組ませる。クイズは、児童にとって楽しく親しみやすいものであり、個人差があっても何らかの形で参加できるよさがある。また、話の内容を知らないとクイズは作れないので、必然的に本を読もうとする姿が期待できる。

知っている昔話が限られているという事前アンケートの結果を受け、たくさんのお話を読んでみたいという思いをもたせたい。そのために１時目では、「むかしばなしみつけ」や昔話クイズに取り組ませる。「むかしばなしみつけ」では、知っている昔話を見付けてワークシートの絵に丸を付け、その昔話を伝え合うことで、昔話への興味・関心を深めていく。昔話クイズでは、教師の読み聞かせを聞き、昔話クイズに挑戦することで、昔話を読んで「自分もクイズを作ってみたい。」という思いをもたせ、読書活動への意欲を高めることにつなげたい。

１時目の授業後に、児童がいつでも昔話を読むことができるように昔話コーナーの場（公立図書館の団体貸し出しを利用）を設置する。１時間目に出てきた話を読んだらワークシートの絵にシールを貼り、それ以外の話を読んだら裏面の読書の記録に題名を記録することを伝え、読書意欲を高めると共に、児童の知っている昔話の広がりを視覚的に実感させたい。

２時目では、読んだ昔話を元にクイズを作っていく。選んだ昔話の面白さや楽しさを伝えるために、どのようなクイズにしたらよいか考えさせる。○×クイズやペープサートを使用したクイズなど、児童が自ら出題方法を選択し、主体的に楽しく活動に取り組めるようにしたい。

３時目では、クイズ大会を行う。より多くの友だちと交流することで、様々な昔話に出会い、さらに読書生活を広げる機会になるのではないかと考える。クイズ大会終了後に、デジタル教科書に掲載されている昔話の歌を紹介することで、昔話ならではの言い回しや語彙に親しませる。最後に、麓地区に伝承されている昔話「うーしとの足跡」の読み聞かせを行い、３年生の教科日本語「昔話を読もう・楽しもう②」の単元に繋げていく。

本単元では、「教科「日本語」授業づくりの１０の視点」のうち、以下のことについて重点的に取り組んでいく。

【教科「日本語】授業づくりの１０の視点　①「学びたい」という思いを揺さぶる魅力的な教材との出会い】

１４の昔話が描かれている１枚絵を作成し、活用する。「むかしばなしみつけ」では、この１枚絵の中から知っている昔話を見付けることで、学びへの意欲を高めていく。

３　単元の目標

描かれている情景や登場人物の気持ちを想像しながら、自分で読んだり読み聞かせを聞いたりすることを通して、昔話に親しむ態度を育てる。

４　単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
昔話を楽しく聞いたり読んだりしている。	昔話を聞いたり読んだりしながら昔話のよさを感じ取っている。	昔話に興味を持ち、昔話を読もうとしている。

５　指導計画と評価の計画（全３時間）

時	学習活動	評価規準（評価方法）○記録に残す評価・指導に生かす評価		
		知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
１本時	１枚絵の中にある「むかしばなしみつけ」をする。 昔話を聞き、「むかしばなしクイズ」に挑戦する。 【①教材との出会い】			・昔話に興味をもち、「むかしばなしみつけ」に進んで取り組もうとしている。（行動観察）
課外	並行読書を通し、日本の昔話に親しむ。 読んだ昔話をワークシートに印す。	・いろいろな昔話があることを知る。		○進んで昔話の読書に取り組もうとしている。（「昔話の一枚絵」）
２	選んだ昔話の中から「むかしばなしクイズ」を作る。一人学び→ペア活動 【⑤協働的な学び】	○自分が読んだ昔話の中からクイズを作っている。（ワークシート）		
３	「むかしばなしクイズ大会」をする。 【⑥説明・発表の機会の充実】 昔話の歌を聞き、歌う。 鳥栖市麓地区の昔話「うーしとの足跡」について知る。		○自作のクイズを友達に紹介したり友達の作ったクイズを解いたりする。（行動観察）	・身近な昔話への関心を高める。

６　本時の学習（１／３）

（１）目標

「むかしばなしみつけ」に進んで取り組み、昔話に興味をもつことができる。

（２）展開

過程	学習活動	（○）教師の指導・支援　　（◆）評価
つかむ	１　「おむすびころりん」を音読し、日本の昔話を学習したことを思い出す。 ２　本時のめあてを知る。	○国語科で学習した「おむすびころりん」の登場人物やあらすじを思い出させ、昔話の学習をする雰囲気作りをする。
	しっている　むかしばなしをみつけて、みんなで　つたえあおう。	
考える	３　「むかしばなしみつけ」をしよう。 （活動１） ・あ、ももたろう。 ・おむすびがあるから、おむすびころりん。	○昔話の場面絵がいくつか入った１枚の絵を見て、どんな話が隠れているか探す活動をすることを知らせる。 【授業づくりの 10 の視点①教材との出会い】 ○電子黒板に映し出した絵の中から昔話の場面絵を見付け、印を付け、題名を発表させる。
学び合う	(1) 見付けた話に丸を付け、題名を知っているときはワークシートに書く。 ・うらしまたろうみつけた。 ・見たことあるけど、題名は分からない。	○電子黒板と同じ絵が描かれたワークシートを配布し、見付けた話に丸を付けさせる。題名も知っているときは絵の中や周りに書き込ませる。
	(2) 見付けた話をペアで伝え合う。 ・きんたろうがあるよ。 ・私も見付けた。 ・すずめの出てくる話は、なにかな。	○「おむすびころりん」を例に話し合いの視点（題名、登場人物、出来事など）を示し、見付け話についてペアで伝え合わせる。
	(3) 見付けた話を全体で発表し合う。 ・ももたろうです。犬、猿、キジが出てきます。 ・かぐや姫です。竹から生まれて、最後は月に帰ります。 ・はなさかじいさんです。ここにはいないけれど、犬のポチが出てきます。	○絵に印を付けながら、題名を発表させる。 ○知っている話に挙手をさせ、多くの児童が既に知っていた昔話については、登場人物や簡単な出来事など問い、聞いたり見たりした話を思い出させる。 ◆昔話に興味をもち、「むかしばなしみつけ」に進んで取り組んでいる。【主体的に学習に取り組む態度】（ワークシート） B：丸を付けた絵の簡単な紹介（題名・登場人物・出来事など）をすることができる。 C：友だちの話を聞いて、知っている話があれば書き加えるように声を掛ける。

まとめる 振り返る	4　「むかしばなしクイズ」に挑戦しよう。(活動2) (1)「さるかに」の読み聞かせを聞く。 (2) クイズに挑戦する。 ①さるとかにのお話の中にでてこなかったのは誰でしょう？ 1．はち　2．いぬ　3．かに (答) 2．いぬ ②囲炉裏の中からとびだしてきたのは誰でしょう? (答) くり 5　本時の学習を振り返り、次時の活動について知る。 ・知っている話がたくさんあって楽しかった。 ・クイズが楽しかった。 ・知らない話があったから、読んでみたい。	○同じ話でも、内容が違うことがあるということを知らせる。 ○初めて聞く児童も多いと考えられるので、登場人物に着目して話を聞くように伝える。 ○読んだ話の中から「誰でしょうクイズ」や「ペープサートを使用したクイズ」を出し、昔話やクイズ作りへの興味関心を高めるようにする。 ○楽しかったことややってみたいことなど振り返りの視点を示し、今日の活動を振り返らせる。 ○「昔話コーナー」の紹介をし、次時は自分が選んだ昔話で、クイズを作ることを知らせる。

むかしばなしを　よもう・たのしもう

なまえ【　　】

㋮しっている　むかしばなしをみつけて、みんなで　つたえあおう。



★がくしゅうのながれ・ふりかえり★

なまえ【　　】

	がくしゅうすること	ふりかえり		きもち・かんがえ
1	①「むかしばなしみつけ」をする	◎がんばった・たのしかった ○できた △あまりできなかった	◎○△	わかったこと たのしかったこと がんばったこと しつもんしたいこと やってみたいこと
	②みつけた　むかしばなしを　ともだちに　つたえる			
	③よみきかせを　きく			
	④「むかしばなしクイズ」に　こたえる			
	📖いろいろな　むかしばなしを　よもう			
2	①「むかしばなしクイズ」をつくる			
	②じぶんのクイズをともだちにだす			
	③ともだちのクイズに　こたえる			
3	①「むかしばなしクイズ」をだす			
	③ともだちの　クイズに　こたえる			
	④よみかせを　きく			

第４学年２組　教科「日本語」学習指導案

日　時　令和８年　10 月７日（水）５校時
場　所　４年２組教室
児童数　28 人
指導者　田代　勇平

１　単元名　「方言を楽しもう」

２　単元について

（１）教材観

方言は、それぞれの地域の風土や歴史、暮らしの中で育まれ、受け継がれてきた言葉であり、日本語の豊かさや多様性を表す言語文化の一つである。同じ意味を表す言葉であっても、地域によって言い方や響き、リズムが異なり、その土地の人々の暮らしや思いが表れている。そのため、家族や友人など親しい間柄や同じ土地の人同士で会話をする場合、方言を使用した方がより一層気持ちが伝わるというよさがある。現代の生活においては、聞いたり話したりする機会が少なくなっている方言であるが、共通語では感じられない親しみや温かさ、面白さを感じられることが方言の魅力である。本単元は、日本各地の特色的な方言について調べ、班ごとに「おすすめの方言クイズ」を作って楽しむ活動に取り組む。これによって、日本語の豊かさや地域文化のよさを実感することができる教材と考える。

（２）児童観

本学級の児童に、方言についてのアンケートを行った。「方言」について、クラス全体の40%が意味を知っており、60%が「言葉は知っているが、意味は知らない」「言葉を知らない」と答えている。方言の具体例を挙げ、聞いたことがあるかのアンケートを行うと、『そいぎ』･･･48%　『はらかく』･･･45%　『ぬっか』･･･35%　『とっとっと』･･･31%という結果になった。このように、方言について聞いたことがある児童が多い一方で、方言を使っていると答えた児童は 30%だった。実際には「～けん」「～せんといかん」「～したと？」など、語尾に方言を使っていることが多いが、それらを「方言」として意識している児童は少ない。祖父母と同居している児童が少ないため、昔ながらの佐賀弁を話す機会はほとんどないが、方言に対しては、「面白い」「聞いたことがある」など、興味を示す児童が多い。

学習には意欲的に取り組む児童が多く、動画作りやクイズ、寸劇などの体験的な活動にも、友達と協力しながら楽しく取り組むことができる。しかし、みんなの前で自分の考えを伝えることにためらいを感じる児童が多く、「伝えたい」という思いはあっても、思い切って表現することができないことが課題である。また、少人数での話合い活動では、自分の考えを伝えることはできるものの、友達の考えのよさを認めたり、互いの感じ方の違いを受け止めたりしながら、自分の考えを深めることについては十分ではない。

（３）指導観

本単元では、佐賀の方言だけでなく、全国の方言に広げてそのよさや日本語の豊かさに気付かせたい。地域による方言の違いに気付かせるために、北海道、青森、大阪、京都、愛知、高知、広島、佐賀、鹿児島、沖縄の 10 の都道府県の中から班ごとに１つの都道府県を選んで調べさせる。調べた

方言の中からクラスのみんなにおすすめしたい方言を決め、理由をつけて伝え合わせることで、方言のよさに気付かせたり方言への興味・関心を高めさせたりしたい。班でクイズ作りを進める中で、協働的に学ぶ姿を期待する。

第１時ではまず「とても・すごく」を表す方言がたくさんあることに気付かせ、日本各地の方言に興味をもたせる。その後、教師による方言クイズを行い、単元のゴールを「おすすめの方言のよさが伝わるクイズを作って友達に紹介すること」と明確に示し、意欲と見通しをもって学習を進められるようにする。

第２時は、班で選んだ都道府県の方言について、各自調べさせる。特徴的な方言の意味や使われる場面を調べ、その中から自分のおすすめの方言を選び、その理由を考えさせる。その後、自分が選んだ方言やその理由を交流し合い、クイズに出す言葉を班で１つに絞らせる。

本時では、前時に班で決めたおすすめの方言をもとに、実際の生活場面と結び付けてクイズを作らせる。また、より方言を楽しむクイズにするために作った会話文を見直し、調べた地方の方言を場面に合わせて取り入れさせる。必要に応じて資料やタブレットで意味や使い方を調べさせる。また、使った方言がどのような響きやリズムになるか、実際に声に出して聞き合わせる。最後に、完成したクイズをいくつか紹介し、本時の学びを振り返らせたい。

第４時では、作成した方言クイズを出し合わせる。出題する児童は、選んだ方言を実際に声に出したり、使われる場面を寸劇で表したりして、その方言のよさが伝わるように工夫する。答える児童は、方言の響きや場面を手掛かりに意味を考える。

本時の学習では、教科「日本語」授業づくりの 10 の視点」のうち、以下の項目に重点的に取り組む。

【授業づくりの 10 の視点⑤ 多様な感じ方を認め合う「協働的な学び」の充実】

班でクイズ作りをする中で、方言を使う場面やどのように方言を使うかについて考えを伝え合い、友達の感じ方や考え方のよさを認めながら、自分の見方を広げたり深めたりできるようにする。よりよいクイズにするために、アイデアを出し合って協働的な学びが生まれることを期待する。

３　単元の目標

いろいろな方言に触れることで、それぞれの地域にある方言のよさや大切さに気づき、方言への興味・関心を高める。

４　単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学びに取り組む態度
日本各地で特色豊かな方言が使われていることを知り、それぞれの言葉の意味や響き、リズムの違いに気付いている。	佐賀県の方言、それぞれの地域の方言の響きやリズムの良さを感じ取り、友達と伝え合おうとしている。	各地の方言に触れ、その響きやリズムを楽しもうとしている。

５　指導計画と評価の計画（全４時間）

時	学習活動	評価規準（評価方法）○記録に残す評価　・指導に生かす評価		
		知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
1	教科書にある「すごい」の方言について調べる。 教師による方言クイズや寸劇を楽しむ。 方言について気付いたことや思ったことをペアで話し合う。 単元の見通しをもち、調べたい地方を決める。 【10 の学びの視点①教材との出会い】	・一つの言葉でも地域によって言い方が異なることを理解している。		・地域による言葉の違いに気付き、各地の方言に興味をもっている。
2	選んだ地方の方言について資料やタブレットを活用して調べる。 調べた方言をワークシートに整理し、「おすすめの方言」を決める。（個人） 「おすすめの方言」をクイズ形式で出し合い、班のおすすめの方言を選ぶ。（班活動） 【10 の学びの視点④考えの形成・整理】		○方言の響きやリズムのよさを感じ取り、選んだ方言をおすすめする理由を考えている。（ワークシート）	・進んで方言を調べ、その特徴を捉えようとしている。
3 （本時）	前時で選んだ方言が使われる場面を考え、クイズを作る。（班活動） できあがった台本にさらにその地方の方言を使う工夫を考える。（班活動） クイズを出す練習をする。（班活動） できあがった班からいくつかの班のクイズを発表する。 【10 の学びの視点⑤共働的な学びの充実】		○方言の響きやリズムのよさを感じ取り、意見を出し合いながら方言クイズを作ろうとしている。（ワークシート・発言）	・友達の感じ方や考え方を認めながら、進んで交流しようとしている。
4	作成した方言クイズを出し合う。 方言の響きや場面を手掛かりに、意味を考える。 単元を振り返り、方言のよさや日本語の豊かさについて交流する。 【10 の学びの視点⑥説明・発表する機会の充実】	○各地の方言の言い方や意味の違いに気付いている。	・各地の方言の響きやリズムのよさを感じ取り、友達と伝え合っている。	○各地の方言に触れ、その響きやリズムを楽しもうとしている。（ワークシート）

６　本時の学習（３／４）

（１）　目標

おすすめの方言を使って、方言を楽しむクイズを作ることができる。

（２）展開

過程	学習活動	（○）教師の指導・支援　（◆）評価
つかむ	1　本時の学習を知る。 ㋮方言を楽しむクイズを作ろう。	○前時に決めた方言と本時の活動の流れを確認する。 ○どのようなクイズを作るのか確認する。
考える 学び合う	2　方言クイズを作る。 「○○○の意味は何でしょう。」 「使っている場面の劇をします。」 ・クイズの台本を考える	○選んだ方言の意味や使い方、良さが伝わる場面を考えるようにアドバイスする。 ○台本は４つの会話で作ることを確認する。 ○クイズ作りの見通しをもてるように、第１時に教師が行ったクイズの台本を提示する。
	・作ったクイズにさらに方言を使う工夫を考える。	○方言を使う工夫を事前に教師が示した台本を用いて確認する。 ○言葉の響きやリズムを確かめるために、会話を作りながら実際に声に出したり聞き合ったりすることを意識させる。 ○クイズの中で、第２時で自分が調べた方言や、他の人がおすすめしていた方言も取り入れるように促す。 ○必要であれば、タブレットを用いて方言を調べても良いことを伝える。
	・クイズを出題するときの役割分担をする。	○問題を読む、寸劇をするなど、全員が出題に関われるように役割を分担させる。 **【10の学びの視点　⑤共働的な学びの充実】** ◆方言の響きやリズムのよさを感じ取り、意見を出し合いながら方言クイズを作ることができる。【思考・判断・表現】（ワークシート・発言） B　方言を口に出したり使ったりしながら、自分の考えを出し合い、よりよい方言クイズを作ろうとしている。 C　自分の考えを伝えることができていない児童には、友達の考えについてどう思うか言うように促す。
	3　クイズを出す練習をする。	○自分の役割だけでなく、全員が方言を含む台本を声に出し、響きやリズムを確かめながら練習するように伝える。 ○表情や動きなど、友だちに分かりやすいように工夫することを意識させる。
まとめる	4　できたクイズを紹介する。	○いくつかの班のクイズを紹介し、方言をたくさん使って楽しいクイズができていることを確認し振り返りにつなげる。 ○クイズの答えは本時には伝えず、次時に発表することを出題者と聞き手に知らせる。
振り返る	5　本時の学習を振り返る。 ・方言をたくさん使って楽しく活動できたかや、友達との意見交流で気付いたことを振り返る。 ・次時のクイズ大会について知る。	○振り返りでは、方言を使って楽しく活動することができたか、自分の考えを言ったり友だちの考えを聞いたりして活動することができたかを具体的に振り返らせる。 ○方言の響きを楽しんだり、友達の考えを生かしたりした姿を具体的に取り上げ、学びのよさを共有する。